

いか。」と目に見えるようにはつきりしているのになぜ分らないのかという嘆きと叱責の言葉として書かれています。

そこには主イエスが生きておられると聞いたのに、見当たらなかったこと、イエス・キリストの十字架が示されたのにそれを見失ったことが「物分かりの悪い」と言われています。

そこで、主イエスは旧約聖書全体から御自分を説明されます。それほど長い時間ではなかったでしょう。一、二時間で、旧約全体から主イエスの復活にたどり着く、どのように語られたのでしょうか。何よりも聖書から主イエスの姿が分かってくることが大事だったのです。旧約聖書から主イエスが垣間見える。そして、主イエスが語ればそこが明瞭になっていったことでしょう。

三人は語りながら一緒に歩き、村に近づくと主イエスは先に行かれようとしませんが、弟子たちは主イエスを無理に引き留めます。家に入り食事の席に着きます。その時のことは「一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなつた。」と記されています。

クレオパは二人の弟子には含まれていません。他の箇所にも出てきません。ルカの教会に関わりのある人であったのではないかと思えます。信仰者は全体で弟子と呼ばれますから、この話はすべての信仰者にあてはまることにもなります。失意の内に暗い顔をして歩く者が、心が燃える経験をする。信仰者も主イエスを見失い、見えなくなっている時が

あります。それが心を動かされるようになるのは、見えない時に主が伴われるからです。そこに主イエスがおられることが分かるので、そのように、主イエスが人生の同伴者であったことが見えてくるのです。そこには、聖書が関わっています。聖書と信仰、それがわたしたちの主イエスを知る手立てです。それは、神様の方で与えてくださった方法でわたしたちに与えられた仕方です。この仕方が生きていくのが教会です。

これは、わたしたちが救いを受け入れて、救いに与ったことと同じです。暗い顔で救いが必要としている者が救われて受洗の喜びを受けることができた、そこには主イエスが寄り添ってくださったのです。救いの出来事はいつも聖書と信仰によって見えてくるものです。

エマオへの道筋は信仰に生きる道筋です。人は主イエスに招かれ弟子とされる。主に出会った者です。しかし、「イエスは生きておられる」という肝心なところを見失うのです。心が鈍く物分かりが悪い時があるのです。そのとき主は聖書全体を語る。それは神の民の歩みです。人であれば人生そのものです。

主なる神がそこにおられ、語りかけ、裁き、慰めて回復を与え、御自分の許へと導かれる。そして、聖書全体が神の子、十字架と復活の主イエスを映し出す。二人はこの話が決定的なことに気づきます。

二人は主イエスを引き留め、家に入り食事を共にする。家と食事は生活の場です。そこで主はパンを取り、讚美し折りパンを裂かれます。これは礼拝と聖餐に通ずる場面です。そこで、彼らは目が開けます。これは今でも、

わたしたちの礼拝と聖餐式で思い起こされる場所です。

その弟子たちは「時を移さず出発して、エルサレムに戻ってみると、十一人とその仲間が集まって、本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した。」とあります。復活の主との再会は、こうして追体験され共有され、皆の私自身のものとなりました。

わたしの生涯の重要なところ、まさに急所であるところに主イエスが臨んでくださる。今でも、目が開かれれば、主イエスだと分かり、心が熱くされる。これは教会が携えてきたものです。

教会は今も主イエスの復活によって成り立ち、聖書全体で主イエスを証し、礼拝しています。そうして、この二人の弟子たちと同じく自分に「道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を」共有しているのです。

(三月三十一日 イースター礼拝)

二月講壇一覧

第一主日(二月四日) 公同礼拝

「飲むべき杯」

高橋和人牧師

エレミヤ 四九・一二〜一三

マタイ 二〇・一七〜二八

第二主日(二月十一日) 公同礼拝

「見えるように」

高橋和人牧師

イザヤ 三五・三〜一〇

マタイ 二〇・二九〜三四